

書評

現代イギリス労資関係の手軽な入門書

本書は、労働組合のあるべき機能を執拗に追求しつづけている著者の、第五作目の著作である。著者の説く労働組合のあるべき機能は、処女作『産業史における労働組合機能』（一九七〇年ミネルヴァ書房）以来変わらないう。それは、賃金や雇用機会の標準化を一つの製品市場、一つの企業にとどまらず横断的に拡大してゆく「製品市場外在の組合主義」と、生産点において労働者の裁量分野を不断に拡大し経営権を脅す「蚕食的組合主義」の二つであった。著者は、これらを、処女作においてはイギリス労働組合の政策を史的に追いつつ説いたが、本書では同じイギリスで副題に示す時期に即して説くのである。

本書の内容を簡単に見ておこう。第一章と第二章では、本書の登場人物が紹介される。ウィルソン労働党政権とユニオンリーダー、それに、職場で働く「労働のなかの人々」である。以下第十章までは、この三者の演ずる物語が展開される。すなわち、第三、四、五章では、所得政策の生成・展開・終局をめぐって、第六・七・八章では生産性協約の登場普及、それに対する抵抗をめぐって、第九、十章では法制的改革をめぐって、この三者は

様々にふるまうのである。そこでは、いわゆる「イギリス病」克服をめざす労働党政権の「計画」努力が述べられる。しかし、読者はこれに対する労働組合と職場の労働者の態度に驚きを感じるであろう。労働組合は労働党政権に協力を表明しつつも、あるいはマヌーバー的にあるいは「総論賛成各論反対」的に執拗に自己の既得領域を守ろうとする。そして、職場の労働者たちは、この労働組合が労働党政権に許しがたい譲歩をしたと感じる時は、直ちに組合の認めない山猫ストにはいつ

とで解決しようとし、坐折した。にもかかわらず、なおも「計画」努力を遂行しようとするならば、政府は、今度はその負担を従来の特権者に累進的に背負わせるほかはない。そうしてはじめて、政府は自主管理的社会主義的計画を採用することになり、労働組合はいくらかの妥協をする可能性が生まれるのである。著者は、このように説く。

本書は、現代イギリス労資関係を理解するうえで、手軽な邦語入門書と言えるだろう。読者は、イギリス労働者の階級的団結の強さな「われら」の団結感情と、社会的な制度として既に形成されている労働組合とは、いったいどのような関係にあるものとして著者はとらえているのかという点である。この両者は区別されているかに見えるが（第一、二章、第八章）、しかし総括と展望を述べる時になると、（第十一、十二章）結局はいまいかなかで同質のものとされているのである。

たしかに、イギリスの労働者階級の「われら」感情を欠いては、イギリス労働組合は存在しない。しかし、第一次大戦後のイギリス労資関係史の示すところは、「国家のなかの国家」となった労働組合が「われら」感情を完全には包摂できなかったことなのではないか。その顕在化は、ショップスチュワード運動としてはじまり、現在の労働者管理運動の展開なのである。とすれば、一九六四一七〇の事態の叙述はこの両者の区別対抗の関係が鮮明に描かれなければならないし、また、展望もそれをふまえたものでなければならぬだろう。またそうすることによって、社会制度としての労働組合が、著者とは異なった意味の「国家」であることが明らかとなったはずである。

この疑問点は、実は、あるべき労働組合機能を前提にした上で対象を見るという著者の処女作以来の一貫した方法的視点に、大きく関係しているものと思われる。この視点では見落される重大なものがあるのではないか、ということが評者の本書読後の印象であった。（経済系院生 鷹取健）

『国家のなかの国家』

日本評論社

熊沢 誠著
一八〇〇円

て徹底的に抵抗するのである。かくして、労働党政権は、その目ざす改革にほとんど成功しないまま、政権の座を保守党に明け渡すのである。

第十一章、十二章では、著者は以上の叙述をふまえて展望を述べる。それは、やはり「製品市場外在の組合主義」と「蚕食的組合主義」を追求すべきであった。これがある成果をあげるとするならば、さしあたり国民経済に重い負担を背負わせるだろう。労働党政権は、この負担を主に労働者に背負わせるこ

に驚くかもしれない。階級的とは、もちろん革命的、左翼的の意味ではない。階級として一つの「社会」「文化」を形成しているという意味である。著者はこれを「われら」（US）という言葉で表現している。日本にはほとんど見られないこの特質を認識しなければイギリス労資関係は全く理解できない。そして、本書はこれを現代の問題に即してよく理解できる著作なのである。